

ふるさと再発見シリーズ

# 白老人物伝 1

Shiraoi Person Biography I



# はじめに～「しらおい再発見シリーズ」について～

## 民族共生象徴空間の開設に向けて

2020年4月24日、ポロト湖畔に民族共生象徴空間が開設されます。

先住民族アイヌについて正しい認識と理解を促進するための国立アイヌ民族博物館と、文化の継承や創造発展の拠点となる国立民族共生公園です。

象徴空間ではアイヌ文化の多角的な伝承や共有が目指され、町内外、国内外、そして大人から子どもまで、国や世代の垣根を越えて、先住民族アイヌの世界観や社会観を学ぶことができるようになります。

## “しらおい”を好きになってもらうために

このシリーズは白老町で育まれてきた郷土史について、文化財や文化資源を中心に紹介していきます。

多様で豊かな自然環境に恵まれ、先史時代から現在まで様々な歴史・文化・産業を持つマチを知っていただくこと。さらには、その魅力を人づて、口づてに広めていただき、大きな関心へと発展させていくことが目的です。

平成28年度は『地域学講座』を発行しました。町内に散在する石碑や寺社、産業遺産などを実際に巡ってもらえるよう、マップ形式にまとめています。29年度の本誌、そして30年度と、知りたいとき、学びたいときに、気軽に手に取れる郷土読本として、今後も継続的な発行を計画しています。是非お手元に置き、ご家族や知人へも広めてください。

## 『白老人物伝1』に登場する人々

本誌の登場人物は、時代、出身、性別、活躍した地域は異なりますが、白老を生活の拠点とし、先住民族であるアイヌの人々と同じ時間を過ごしました。こうした時代によって異なる共に生きた歴史を知ることが、未来に向けて共生の歴史を築いていくための一歩だと思われます。

紙面や資料の制約上、十分に紹介しきれない部分も少なからず残されていますが、まずはこうした方々の歩みに触れていただき、興味を持っていただければ幸いです。



# 白老人物伝1 登場人物関連年表

江戸時代	天明 4 (1784)年	初代野口屋又蔵、陸奥大畑から松前へ移住。
	文化 11 (1814)年	三好監物、仙台藩領黄海村で誕生。本名は武三郎清房。
	文化 14 (1817)年	氏家秀之進、仙台藩領大沢村に誕生。
	文政 2 (1819)年	草刈運太郎、仙台城下同心町で誕生。
	文政 10 (1827)年	2代目野口屋又蔵、白老場所請負人となる。
	弘化 2 (1845)年	2代目野口屋又蔵、アヨロ海岸で昆布養殖に着手。
	安政 2 (1855)年	三好監物及び氏家秀之進、白老から択捉島までを探索。
	安政 3 (1856)年	氏家秀之進、初代御備頭として元陣屋へ赴任。
	安政 4 (1857)年	三好監物、2代目御備頭として元陣屋へ赴任。
	慶応 3 (1867)年	草刈運太郎、白老の代官として赴任。
明治元 (1868)年	草刈運太郎、社台で死去。享年 49 歳。 三好監物、黄海村で死去。享年 53 歳。	
明治 11 (1878)年	氏家秀之進、仙台市に創業の第七十七国立銀行初代頭取に就任。	
明治 15 (1882)年	蒲原伸一、佐賀郡鍋島村に誕生。 高橋房次、栃木県乙女村に誕生。	
明治 18 (1885)年	旧仙台藩士茂庭竹泉、草刈運太郎の墓碑を建立。	
明治 25 (1892)年	井深照子、白老村で誕生。	
明治 33 (1900)年	氏家秀之進、84 歳で逝去。	
明治 41 (1908)年	蒲原伸一、井深照子と結婚。	
明治 45 (1912)年	蒲原伸一、白老郵便局長に就任。	
大正 4 (1871)年	野口屋又蔵功績碑が建立。	
大正 10 (1921)年	蒲原伸一、母の生家再興のため満岡へ改姓。	
大正 11 (1922)年	高橋房次、北海道庁立白老病院院長として赴任。	
大正 13 (1924)年	満岡伸一、「アイヌの足跡」を発行。	
昭和 12 (1937)年	高橋房次、道庁立病院廃止後も高橋医院を開業。	
昭和 16 (1941)年	満岡照子の歌集「火の山」が発刊。	
昭和 25 (1950)年	満岡伸一、東京国分寺で死去。享年 67 歳。	
昭和 30 (1955)年	高橋房次、名誉町民第 1 号として表彰。	
昭和 35 (1960)年	高橋房次、享年 78 歳で死去。	
昭和 41 (1966)年	満岡照子、享年 75 歳で死去。 元陣屋跡が国史跡に指定。	
昭和 42 (1967)年	満岡照子の歌集「火山灰」が発刊。	
昭和 43 (1968)年	草刈運太郎史跡保存会発足。	
昭和 59 (1984)年	三好監物の遺品を主たる展示資料とし、仙台藩白老元陣屋資料館開館。	
平成元 (1988)年	白老ペンクラブが満岡照子の歌碑を白老駅前に建立。	

みよしけんもつ  
三好監物



文化 11 (1814) 年 生  
明治元 (1868) 年 没



岩手県一関市藤沢町黄  
海<sup>のみ</sup>の旧領地。墓道標柱  
(上)の先には、旧家  
臣の家や監物の<sup>れいびょう</sup>霊廟  
(下)が現存する。



仙台藩士。元陣屋の建設地を白老に見出し、自身も統率者として赴任した。

幕末の探検家として知られる松浦武四郎と交友があり、詩歌や絵画といった作品も数多く遺した。

文化 11 年 幼名は武三郎。長じて清房  
(1814) を名乗り、藩主伊達慶邦より監物の名を賜る。

安政 2 年 慶邦の命により陣屋建設地  
(1855) を探するため、白老から択捉島までを探索。この報告により、幕府の当初案だった元陣屋の建設地が、勇払から白老へと変更。

安政 4 年 第 2 代御備頭<sup>おそなえがしら</sup>として白老元  
(1857) 陣屋に 1 年間赴任。松浦武四郎と短歌を交わす。

明治 元年 戊辰戦争の渦中で藩内の幕  
(1868) 府方と対立。武士としての最期を遂げるため自刃。享年 53 歳。

明治 2 年 太政官三条実美より「勤王の<sup>きんのう</sup>  
(1869) 大義<sup>たいぎ</sup>を固守<sup>こしゅ</sup>」したとして祭祀料 200 両を賜る。

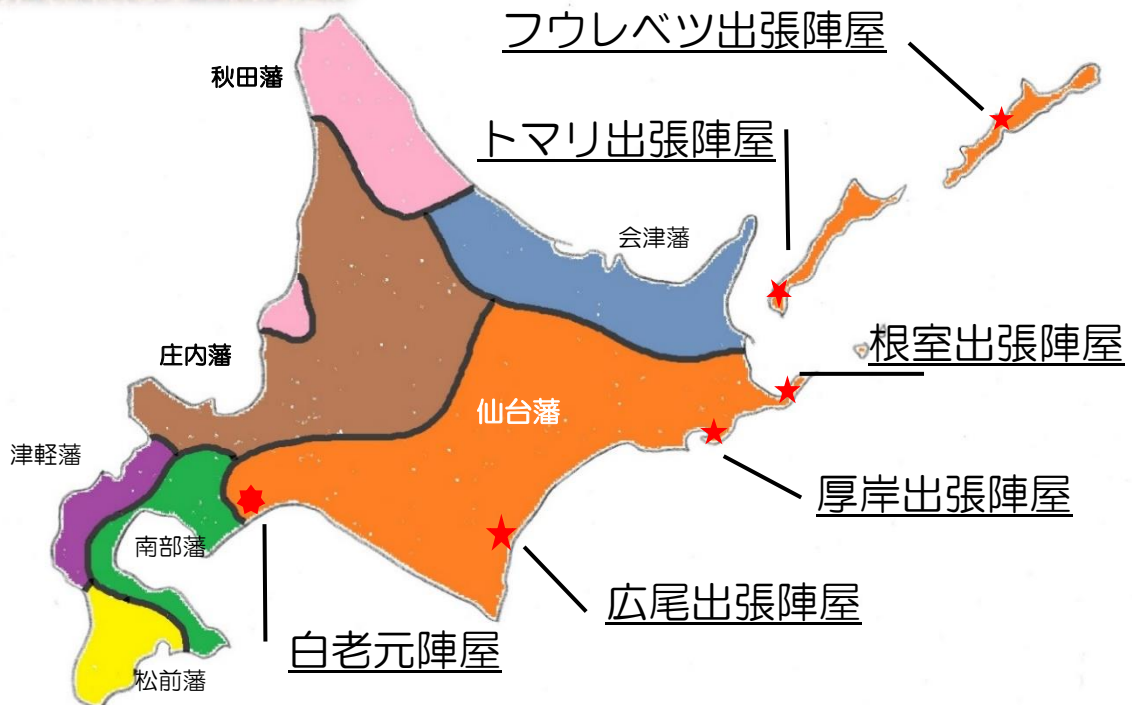
昭和 59 年 子孫より遺品が寄せられ、  
(1984) 町制施行 30 周年記念事業として陣屋資料館が開館。



まち歩きチェック!!

監物が詠んだ短歌の歌碑。「宮柱 太  
しく建てて 祈りける 照日<sup>てるひ</sup>の岡に 君  
が八千代を」とある。昭和44年、太  
田哲氏（宮城県出身の白老仙台陣屋史  
跡保存会会長）によって建立された。

監物と交友のあった松浦武四郎が  
『東蝦夷日誌』のなかで、紹介した。



### 【ここに注目】

陣屋建設の候補地は当初、交通の要所としても栄えていた苦小  
牧<sup>ゆうふつ</sup>の勇払だった。

しかし監物は、より防衛拠点として優れている白老を適地とし  
て進言した。狭く深い溪谷と、ウトカンベツ川に挟まれた地形は  
天然の要塞であり、箱館（函館）からの距離が近いことも物資の  
運搬に便利と判断された。

白老より東側の見張りはというと、十勝の広尾、厚岸、根室、  
国後島のトマリ、択捉島のフウレベツに出張陣屋<sup>てばり</sup>という小さな砦  
を築くことで対応することにした。



うじいえひでのしん  
氏家秀之進



文化 14 (1817) 年 生  
明治 33 (1900) 年 没

三好監物と共に陣屋建設の地を調査し、初代御備頭として陣屋を整備。第3代、第5代と御備頭を歴任した。

文化 14 年 仙台藩領大沢村（現仙台市青葉区）に誕生。

安政 2 年 監物と共に蝦夷地を探索。（1855）

安政 3 年 白老元陣屋の初代御備頭として赴任。およそ6万（1856）6千㎡におよぶ陣屋構えを造営。

明治 11 年 仙台市に創業の第七十七国立銀行初代頭取に就任。（1878）明治27年まで経営に関与。

明治 33 年 84歳で逝去。青葉区北山の覚範寺がくはんじに埋葬。（1900）

【ここに注目】

安政3年から明治元年までの12年間、元陣屋には8代6名の御備頭が赴任した。秀之進は最多の3回4年にわたり、重責を果たした。

初代	氏家秀之進	安政3年から安政4年（1年間）
第2代	三好監物	安政4年から安政5年（1年間）
第3代	氏家秀之進	安政5年から安政6年（1年間）
第4代	瀬成田求馬 <small>せなりたきゅうま</small>	安政6年から万延元年（1年間）
第5代	氏家秀之進	万延元年から文久2年（2年間）
第6代	不明	文久3年から慶応元年（3年間）
第7代	安田竹之輔 <small>やすだたけのすけ</small>	慶応元年から慶応3年（2年間）
第8代	児玉覚之進 <small>こたまかくのしん</small>	慶応3年から明治元年（1年間）



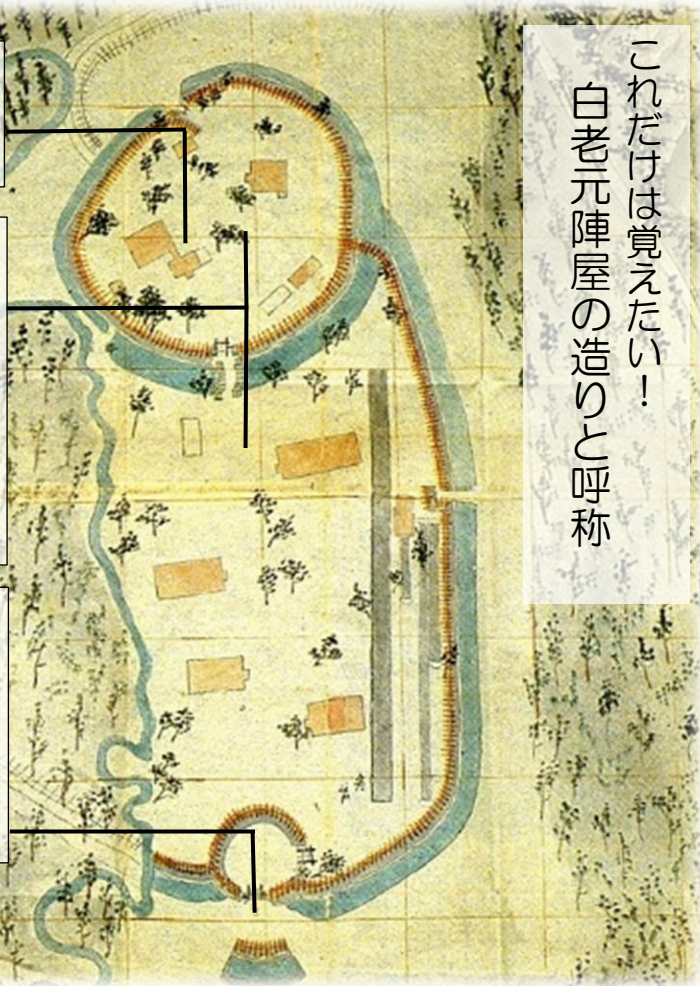
まち歩きチェック!!

塩釜神社の麓に残る灯籠は、秀之進が万延元（1860）年に家臣との連名で奉納したもの。秀之進は当初から白老などの警備地を仙台藩領とするよう、幕府へ嘆願していた。

**本陣**-御備頭の居所であり、陣屋の中核。

くるわ  
**曲輪**-堀割と土塁の内側。本陣を囲む内曲輪と、100名以上の藩士が起居した外曲輪に分かれる。

こぐち  
**虎口**-円形に設けた土塁で侵入を阻んだ。南側の土塁は馬出しと呼ばれた。



これだけは覚えたい！  
白老元陣屋の造りと呼称

### 【ここに注目】

陣屋資料館が所蔵する『白老元陣屋之図』は初期の構築プランにあたる図面だが、土塁の形や建屋の位置関係など、基本となる構図が早くから定まっていたことを示す貴重な資料である。

秀之進は初代の御備頭であると同時に、陣屋建設の総監督でもあった。安政3年4月から着工された元陣屋は、7月までに長屋等6棟、蔵1棟、厩うまや1棟などが設けられ、9月に上棟式が行われるほど、極めて短期間で進められた。



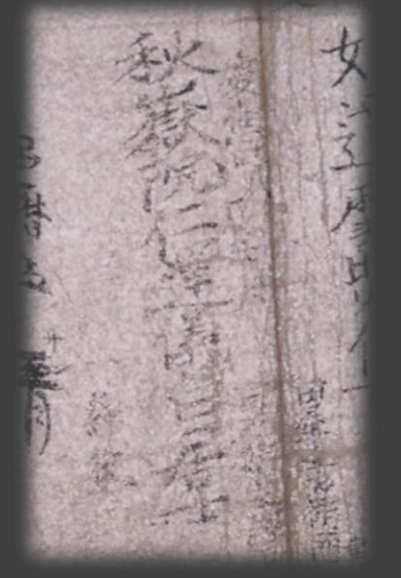
くさかりうんたろう

# 草刈運太郎



「蝦夷三官寺」の一つ、有珠善光寺（上）の永代経（下）に「秋嶽院仁運儀白居士」とある。

文政 2 (1819) 年 生  
明治元 (1868) 年 没



白老や十勝などの警備地が仙台藩領となったため、白老の代官（民政などを担う役職）として赴任した。

明治元年に仙台藩士が撤退した後も白老に残り、押し寄せた官軍方の手によって負傷する。社台の浜で故郷の方角を向き、切腹による最期を遂げた。

- 文政 2年 仙台城下同心町（現仙台市青葉区錦町付近）に誕生。
- 万延 元年 白老、十勝などが仙台藩領となり、代官が派遣される。
- 慶応 3年 白老領の3代目代官として赴任。
- 明治 元年 8月25日に社台の前浜で自刃。享年49歳。
- 明治18年 旧仙台藩士の茂庭竹泉が、登別軟石の墓碑を建立。

昭和43年 草刈運太郎史跡保存会（後に社台史蹟保存会へ改称）が発足。

## 【ここに注目】

官軍方に斬られ、重傷を負った運太郎が身を寄せたのが、社台で漁師をしていた相木林蔵の番屋だった。林蔵の介護も空しく刀傷は治らず、運太郎は自ら命を絶つことを決めた。

自刃した運太郎をその場に埋葬した林蔵は、自然石の墓石を建て、手厚く供養した。そして有珠善光寺へと赴き、名を隠して永代経に供養を願った。



## 社台地区地図ルート



### まち歩きチェック!!

茂庭竹泉が建立した墓碑は、当初もっと浜側にあった。

昭和 43 年に木造の奥屋<sup>おくや</sup>が被せられ、平成 5 年には「屋根のない博物館」のアイテムとして、旧社台小学校校庭の一角へ移設された。



奥屋のついた墓碑と供養祭の様子



旧社台小学校へ移された墓碑

### 【ここに注目】

草刈運太郎史跡保存会は、昭和 43 年、運太郎の没後 100 年に発足した。

明治維新から 100 周年であったことに加え、その 2 年前に白老仙台藩陣屋跡が国指定史跡となったことも関わっていた。愛郷心の涵養のため、同会では社台史蹟愛護少年団を結成し、結成の翌年には団歌を作成している。

# 2代目野口屋又蔵



天明元 (1781) 年 生  
安政 4 (1857) 年 没

江戸時代後期から明治初頭にかけて、白老場所請負人として活動した。先祖は南部藩領の大畑なんぷはん おおはた（現青森県むつ市）で木材を扱う廻船問屋だったが、白老場所を拠点とした2代目又蔵は昆布養殖や本州向けの肥料の製造に手腕を振るった。

天明 4年 初代又蔵、大畑より松前へ移住。

(1784)

文政 10年 2代目又蔵、白老場所請負人となる。明治2年までの間、家名を襲名しながら同場所を経営。

(1827)

弘化 2年 箱館から昆布の付着した石数百個をアヨロ海岸へ沈め、道内初の試みであった昆布養殖に着手。

(1845)

大正 4年 野口屋の功績を顕彰するため、白老幌別両郡の有志と勇払白老水産組合が協力し、石碑を建立。昭和59年に現在の虎杖浜神社境内へ移設。

(1871)



まち歩きチェック!!

野口屋又蔵功績碑は大正4年に建てられた。碑文には投石による昆布養殖の実績が刻まれ、現在でも虎杖浜神社からアヨロの海を見守っている。

※4代にわたる野口屋又蔵の足跡、特に生没年については諸説ある。また、代替わりの年代も明らかとなっていない。本稿はそ

うした実態を踏まえつつも、郷土史家である故高田寅雄氏がまとめた「ふるさとアヨロ (2003年)」、及び同氏が又蔵の子孫と著した「三代目野口屋又蔵の謎 (2003年)」を主たる典拠とし、また、時期や年齢から、初代より野口屋を継いでいても不自然ではないと考え、昆布養殖の功績を2代目によるものとして編集している。





昭和40年頃の真昆布漁（山崎寿昭氏撮影）

三石昆布種の虎杖浜昆布（白老観光協会提供）

### 【ここに注目】

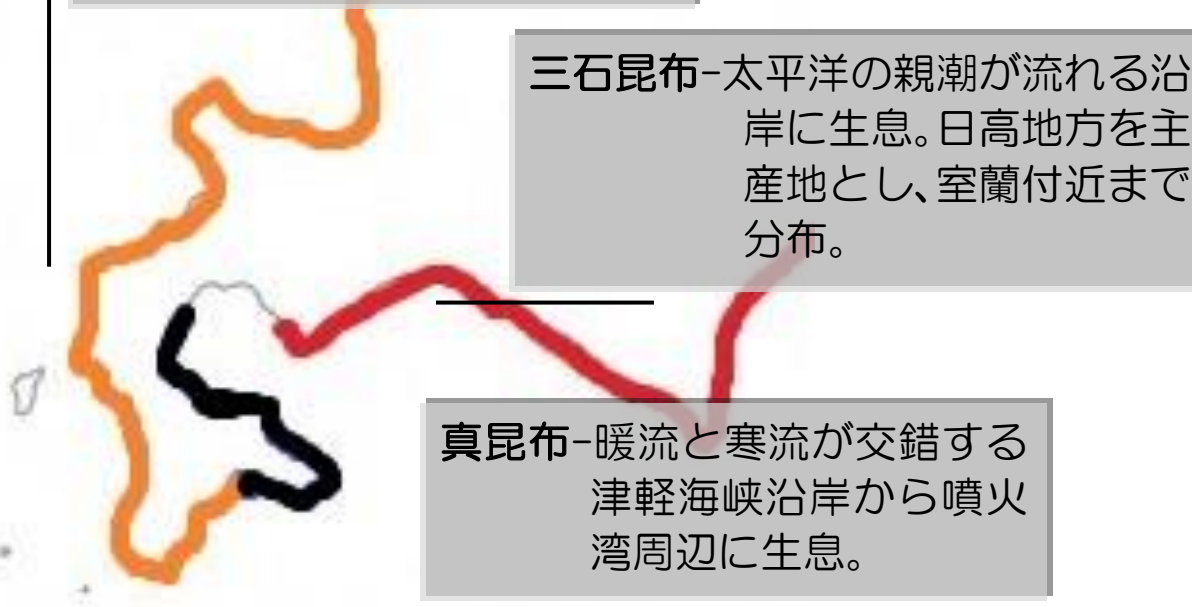
又蔵が養殖した昆布は、現在も函館周辺で採集される真昆布<sup>まこんぶ</sup>だった。不思議なことに、明治まで評価されていたこの事業は、時代が昭和に移ると、日高地方で同様の手法を試みた野口屋と同時期の請負人、山田屋文右衛門<sup>やまだやぶんえもん</sup>との比較のなかで、不成功の扱いを受けるようになった。

現在の白老では真昆布の採取がない。白老町と虎杖浜漁業協同組合は、昭和43年以降、水産試験場の指導のもと、昆布の菌を植えたはえ縄を海中へ投じる手法での、真昆布の養殖を試みている。昭和63年をもって断念したが、昭和末期まで白老と真昆布の養殖は深い関わりを持っていた。

細目昆布-日本海を北上する暖流の沿岸に生息。

三石昆布-太平洋の親潮が流れる沿岸に生息。日高地方を主産地とし、室蘭付近まで分布。

真昆布-暖流と寒流が交錯する津軽海峡沿岸から噴火湾周辺に生息。



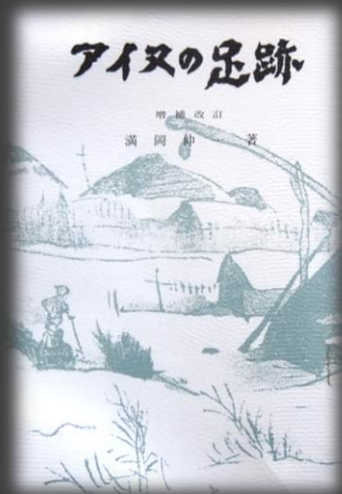
みつおかしんいち

# 満岡伸一



明治 15 (1882) 年 生  
昭和 25 (1950) 年 没

(「アイヌの足跡」より複写)



著書『アイヌの足跡』

白老村の郵便局長として赴任した満岡伸一は、業務の傍らアイヌ民族の風習・伝承の記録化に取り組んだ。また、妻照子は白老に生まれ育ち、女流歌人として文壇に名を馳せた。

2人の文化的活動は広く知られ、夫婦の案内を頼りに白老を訪れた文人や研究者も少なくない。

明治 15 年 <sup>なべしまむら</sup>佐賀郡鍋島村（現佐賀市）の  
(1882) 蒲原家に誕生。8歳の頃、室蘭市輪西へ移住。

明治 39 年 札幌師範学校講習科を卒業。  
(1906) 札幌近郊で教鞭を振るう。

明治 41 年 井深照子と結婚。13年後、  
(1908) 母の生家再興のため満岡姓を名乗る。

明治 45 年 白老郵便局長に就任。  
(1912)

大正 13 年 白老アイヌの風習などを独自に記録し、「アイヌの  
(1924) <sup>あしあと</sup>足跡」として発刊。

昭和 17 年 健康を害して退職。東京国分寺へ移住するも、昭和  
(1942) 25年に67歳で死去。

## 【ここに注目】

満岡夫妻の邸宅は、現町役場の東隣にあった。夫婦で文学的な活動をしていたことから知人は多く、著名な歌人を招いた歌会も催された。



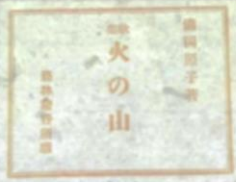
満岡家での歌会の様子



みつおかてるこ  
満岡照子



明治 25 (1892) 年 生  
昭和 41 (1966) 年 没



照子の第2歌集。「火の山」は樽前山を指す

- 明治 25 年 (1892) 白老村の井深家に誕生。17歳頃、独習で作歌活動開始。
- 明治 41 年 (1908) 蒲原伸一と結婚。
- 昭和 2 年 (1927) 第1歌集「満岡照子短歌選集」を発売。
- 昭和 13 年 (1938) 自宅で著名人を招いた短歌大会を開催。
- 昭和 16 年 (1941) 第2歌集「火の山」発売。翌年、東京国分寺へ移住。
- 昭和 41 年 (1966) 死去。享年 75 歳。
- 昭和 42 年 (1967) 第3歌集「火山灰」発売。
- 平成 元年 (1988) 「白老ペンクラブ」会員が中心となり、JR 白老駅前広場に歌碑を建立。



まち歩きチェック!!

白老駅前チュプカの広場の歌碑。

「白老はわが古郷よ  
えき 驛を出て先づ眼にした  
しタモの大木」。

たかはしふさじ

# 高橋房次

白老の地域医療に多大な貢献を果たした。新冠や北広島などでも医療に携わった後、道庁立白老病院院長として赴任した。同病院が閉鎖された後も、個人医院として医療活動を続けた。

明治 15 (1882) 年 生  
昭和 35 (1960) 年 没



往診に向かう日常。昭和 7 年からは拓殖医も委嘱された。



名誉町民メダル。次男  
昭氏がデザインした。

- 明治 15 年 栃木県しもつがく下都賀郡おとめむら乙女村（現小山市）に誕生。
- 明治 33 年 この頃、東京のさいせいがくしゃ済生学舎で医学を学ぶ。
- 大正 4 年 新冠郡高江村（現新冠町）に村医として赴任。
- 大正 11 年 「旧土人保護法」の改定に伴い、白老のほか平取、静内、浦河の 4 ヶ所に道庁立病院が誕生。白老病院の院長として赴任。
- 昭和 7 年 ホロケナシ（現森野）地区の拓殖医に委嘱。
- 昭和 12 年 同病院の廃止後も高橋医院を開業。
- 昭和 30 年 白老町の町制施行に伴い、名誉町民（第 1 号）として表彰。
- 昭和 34 年 北海道文化賞受賞。胸像が旧白老小学校に建立。
- 昭和 35 年 死去。享年 78 歳。葬儀には 1,000 人以上が参列。曹洞宗ぜんしょうじ禅照寺に埋葬。



## 大町・高砂地区地図ルート



### 【ここに注目】

アイヌ民族の同化政策を進めるため、明治 32 年に施行された「旧土人保護法」。道庁立病院はこの法律に基づき、アイヌ民族へ近現代的な医療を施す目的で建てられた。大正 8 年の改定に先立ち、道庁は衛生調査を実施し、アイヌ民族の人口が多い白老を「結核が跋扈跳梁<sup>ばっこちようりょう</sup>」する地域として報告する。結核、梅毒、皮膚病は和人が持ち込んだ伝染病だが、道はまん延する理由をアイヌ民族の医療に対する知識の欠如に求めた。

白老病院長として赴任した房次医師は精力的に家々を訪ね、健康状態の把握に努めた。来院者へは分け隔てなく接し、献身的な医療を貫いた。その評判を聞きつけ、当時は幌別、厚真、早来からの来院もあったという。



高橋医院の外観

※人物と病院外観の写真は掛川源一郎氏の撮影

# CONTENTS

みよしけんもつ  
三好監物

うじいえひでのしん  
氏家秀之進

くさかりうんたろう  
草刈運太郎

のぐちやまたぞう  
野口屋又蔵

みつおかしんいち  
満岡伸一

みつおかてるこ  
満岡照子

たかはしふさじ  
高橋房次

編集  
発行  
問合先

郷土資料デジタルアーカイブ化等事業編集委員会  
白老町教育委員会生涯学習課  
仙台藩白老元陣屋資料館  
TEL 0144-85-2666  
E-mail [jinya@town.shiraoi.hokkaido.jp](mailto:jinya@town.shiraoi.hokkaido.jp)